

日米の女性僧侶の声

—国際ワークショップ「越境する日本の女性仏教徒」—

本多彩

(兵庫大学共通教育機構准教授)

目次

1. はじめに
2. 国際ワークショップ「越境する日本の女性仏教徒」
3. ワークショップからみえてきたこと：ジェンダーともう一つの課題
4. おわりに—今後に向けて

【キーワード】

女性僧侶 日米の浄土真宗 ジェンダー 人種 体験と語り

1. はじめに

グループ 2 ユニット B は「多文化共生社会における日本仏教の課題と展望」をテーマとして、仏教の社会貢献、他宗教との宗教間対話、さらに仏教と現代の諸課題について研究会やワークショップ等でその研究成果を国内外に発表してきた。仏教が長年育んできた地域社会とのつながり、仏教者や仏教教団等から社会へのアウトリーチ、これらがどのような形で行われてきて、現在どのような課題があるのかを明らかにもしてきた。その一方、仏教が抱え続けてきた課題に対しても、目を背けることなく厳しく検証してきた。その一つがジェンダー不平等である。グループ 2 ユニット B では、日本仏教とジェンダーについて数年間、継続的に現場の声や研究者からの発表を設定し、多くの人と一緒に考える場を設けてきた。

仏教と女性については、仏教史学、仏教学、経典研究、教学などさまざまな分野で研究対象となってきた。しかし、これまでジェンダーについて取り上げられることはあっても、それは一時的な研究対象にとどまることが多く、また仏教研究のなかでは周縁的な位置づけをされてきた。宗教学者の川橋範子は、宗教学には、ジェンダー研究への強い抵抗感、研究者自身のジェンダーへの無自覚、そしてジェンダーを研究する研究者の中立性に課題があるといわれ、「宗教学とジェンダー研究のきまざい関係」があると述べている¹。こうした関係は、多少なりとも仏教とジェンダー研究との間にもいえるのではないだろうか。

近年、仏教の現場にいる女性たちから、男性中心の寺院のあり方やジェンダー不平等に対して具体的でリアルな声が上がってくるようになった²。女性たちは、寺院や仏教コミュニティの中に身を置いて生活しながら、女性として求められる立場や活動や振る舞いについて、違和感を感じ、変化を求めている。こうした現場にいる女性の言葉や思いに心を寄せて耳を傾けてみてはどうだろうか。ジェンダーという視点で仏教の現状を見つめることで、仏教研究の諸分野が発展していく可能性もあるだろう。

このワーキングペーパーでは、昨年 BARC で開催された国際ワークショップの内容を中心に、日米の浄土真宗の女性を取り巻く実情を明らかにする。今回の成果を携えて、

¹ 田中雅一、川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社、2007、9-12

² 女性と仏教 東海・関東ネットワークはそのなかでもよく知られているグループであり、『仏教とジェンダー』（朱鷺書房、1999）、『ジェンダーイコールな仏教をめざして』（朱鷺書房、2004）、『新・仏教とジェンダー』（梨の木舎、2011）を出版している。

今後の新たな研究につなげていきたい。

2. 国際ワークショップ「越境する日本の女性仏教徒」

寺院にいる女性がどのような体験をしてきたのか、それを日米の女性僧侶たちが語ったのが、2017年7月17日に開催された国際ワークショップ「越境する日本の女性仏教徒」であった。登壇した2名の女性僧侶は、日本とアメリカ本土の浄土真宗寺院で活動してある。両者の発表内容を簡単に紹介する。

1人目の発表者、ヴィクトリア・吉村はイギリス出身の女性である。九州の寺院の長男である男性と結婚し、現在は自らも僧籍を取得して法務にも携わりながら夫と子どもと寺院で生活をしている。吉村は、日本の浄土真宗ではほとんど見かけない白人女性僧侶である。僧侶の妻でもあり、子どもたちにとっては母でもある。そして日本社会・仏教組織で彼女は、白人仏教僧侶として特徴的な体験を重ねてきた。その中で吉村は、いくつかの心に大きな衝撃を受けた経験を報告している。

吉村には3人の子供がいる。長男が誕生した時に周囲の人から言われた「髪の毛が黒い子供が産まれてよかったね」という言葉は、日本人同士の夫婦であれば、かけられることのない言葉であり、彼女にとっては大変な衝撃であった。夫が入院したことをきっかけに僧籍を取得した後も、女性が法務に携わっていることで、周囲からは厳しい目を向けられたことをあげた。女性であるがゆえに、同じように教師資格を取得している夫とは異なる対応を受けることもあり、門徒など周囲からなかなか受け入れられないといった体験をしてきたという。女性僧侶として宗教の現場に立つことの難しさを肌身で感じてきたという報告であった。

女性であるだけでなく人種の差異が、吉村に向けられてきた好奇の目の原因であることに、発表で気づかされた。日本では、非アジア系の女性が寺院で活動しているケースは少なく、彼女の場合は白人女性という「ものめずらしさ」という目をもって見られてきたのである。吉村の体験や感じたことから、日本仏教とジェンダー、そして人種の問題についても考えさせられた。

2人目の発表者パトリシア・宇宿は、アメリカのカリフォルニア州南部にある仏教会（寺院）で開教使（僧侶）を勤めている日系アメリカ人女性である。2007年に、*Currents of Change: American Buddhist Women Speak Out on Jodo Shinshu* (Berkeley: Institute of Buddhist Studies) を出版した。著書で宇宿は、アメリカの浄土真宗女性メンバー（門徒）

を対象に調査を行い、その結果をまとめている。アメリカの浄土真宗女性メンバーは浄土真宗や仏教の教えに説かれている高い平等性と、実際の組織や仏教会にみられる男性優位のあり方との間にギャップを感じていることがわかった。また、アメリカ浄土真宗において、長年女性僧侶が少ない状態が続いているのは、女性僧侶のロールモデルがないことが課題としてあるとしている。

前回の調査から15年が経過し、今回のワークショップで宇宿は、アメリカの浄土真宗ではジェンダー意識に変化がみられることを報告した。現在、仏教会ではジェンダー不平等を感じることはないという。また女性のプレゼンスが高まり、リーダーシップをとる立場に女性が就くようになってきたともしている。こうした変化をもたらしたのは、メンバーの世代交代であるとした。今日、仏教会を支えているのは、アメリカで教育を受けジェンダー不平等についても、はっきり認識し、問題があれば指摘し抵抗してきた世代である。こうしてメンバーの間にジェンダーイコールの意識が浸透していくことになり、組織の中でも変化がもたらされたとする。さらに平等性を大切にする仏教の教えと、実際の組織にみられるジェンダー不平等の間のギャップが、以前より少なくなってきたとも報告した。

3. ワークショップからみえてきたこと：ジェンダーともう一つの課題

アメリカ仏教を研究するケネス・タナカは、アメリカの仏教の特徴として平等化があるという。「アジアの伝統仏教では、組織内の上下関係がしっかり決められている。それを象徴するのは、仏教組織が出家僧侶、出家僧尼、在家男性、在家女性という上下関係にある四つのグループで構成され、在家より出家、そして女より男が優先されてきたことである。(中略)このように固定された上下関係は、アメリカ仏教においては弱まり、平等化の傾向にある」³としている。報告では、まずイギリス出身の女性僧侶による日本の浄土真宗寺院での体験と思い、次に日系アメリカ人女性によるアメリカ浄土真宗寺院の体験と変化が語られた。この両者の発表は対照的であった。前者では今まさにジェンダー不平等の渦中にあり、後者はほとんどそれを感じなくなった宗教現場にいるという。後者はタナカがいうところのアメリカ仏教の平等化の流れを受けている。

2016年BARCで開催されたワークショップ「仏教の女性観を考える-ジェンダーの視

³ ケネス・タナカ『アメリカ仏教：仏教も変わる、アメリカも変わる』武蔵野大学出版会、2010、144

点から」⁴のなかで、長野県の曹洞宗寺院の住職である飯島恵道が「ジェンダー不平等な現状に関する報告」として、法要や現場で今でも若い男性僧侶より下位に置かれるといった状況にあると発表した。またこうした体験について同じ尼僧たちと話してみたが、尼僧たちはジェンダー不平等を感じながらも、声をあげることにはあまり積極的ではないということであった。

吉村や飯島は、女性であるがゆえに受けてきた待遇の違いや、女性はこうあるべきという考えに基づいて向けられる周囲からの視線や言動を経験してきた。そしてジェンダー不平等を実感して息苦しさの中から声を上げているのである。こうした経験や声を聞き、課題に向き合って解決に向かう兆しが日本の真宗寺院や組織にみられるのだろうか。残念ながら報告では大きな変化や動きは報告されなかった。ただ、年月が経過するにしたがって、門徒たちが少しずつ吉村を受け入れていったようにも感じた。日本の宗教者、仏教者は、ジェンダー不平等を感じながら宗教現場で活動する人をどのように見ているのだろうか。仏教に携わる人びとの意識、社会全体が、ジェンダーイコールの方向に向かっていくのにはまだ時間がかかるのかもしれない⁵。

アメリカの浄土真宗では、ジェンダー問題がほぼなくなったと宇宿は報告した。ワークショップでコメンテーターをつとめた川橋は、アメリカの浄土真宗では問題に上らなくなったとされたジェンダーの問題について、教団や寺院内で実は根深い課題としてまだあるのではないかとコメントした。また、アメリカではキリスト教やユダヤ教の持つジェンダーの視点（フェミニスト神学など）が真宗教団へ及ぼした影響とその可能性についても質問した⁶。

アメリカの浄土真宗ではジェンダーの問題が少なくなったとはいえ、実際には教団や寺院のなかの女性のプレゼンスはまだ高くはないといえるのではないかと。2018年2月の浄土真宗北米開教区 National Council Meeting（全国開教使・メンバー会議）に参加し

⁴ BARC ではそれ以前の2014年7月19日にも国内ワークショップ「現代日本の仏教とジェンダー」を開催している。マーク・ロウ「尼僧伝-現場の女性僧侶」、飯島恵道「ジェンダー・臨床・スピリチュアル-伝統的出家型尼僧の立場から」、本多彩「越境する日本女性仏教徒」の発表者3名にコメンテータ川橋範子を迎えている。

⁵ 日本でジェンダーに取り組む動きについては、川橋範子・熊本英人「宗教運動」（田中・川橋編、前掲書、248-263）や、川橋範子『妻帯仏教の民族誌：ジェンダー宗教学からのアプローチ』（人文書院、2012）にある。

⁶ キリスト教やユダヤ教からの影響については宇宿からはっきりとした回答はなかったが、アメリカで活動する宗教団体として、こうしたユダヤ-キリスト教からの影響を看過することはできないと思われる。

たが、シンポジウムや会議のなかで女性の登壇はみられなかった。女性開教使の数も少なく⁷、仏教会の会長は男性がほとんどであった。リーダーシップ的立場の女性が以前より多くなったことは間違いないが、数的にはまだ少ない。

世代交代や意識の変化があつて、アメリカの浄土真宗ではジェンダー不平等をほとんど感じなくなったということは、大きな前進であることに間違いはない。このことを肯定的に受け止めつつも、まだこれでよいと安住するには早いようにも思う。教団組織の各部各所で女性のプレゼンスが高くなっていくような変化が近い将来見られることを期待したい。

今回のワークショップから日本仏教が将来直面するかもしれない課題が見えてきた。それは人種、エスニック問題である。例えばアメリカ仏教では、白人仏教徒、改宗仏教徒、アジア系仏教徒、非アジア系仏教徒のように人種がひとつの仏教徒の分類基準となっている⁸。また、*The Oxford Handbook of Contemporary Buddhism*にも *Buddhism, Race, Ethnicity* という章が登場する⁹。これらのように、海外では人種・エスニック関係は仏教とも深く関連している。アジアを中心に広がっていた仏教が、欧米やアフリカにも伝播していったことで、アジア系ではない人たちにも仏教徒が増加し、世界の仏教は人種・エスニック多様性にも取り組んでいる。

⁷女性開教使の数が少ないとしたが、これに関してはアメリカが日本とは異なる仕組みをもっているため、それを考慮に入れる必要がある。アメリカでは正式な開教使として任用されると、現地の総長が出す仏教会間の異動の対象となる。しかし異動の対象とならない開教使補 (Minister's assistant) という立場も設けているのである。開教使補の中には女性も多く、一部は得度を受け僧侶となっている。宇宿の報告には具体的に登場しなかったが、おそらく得度している女性開教使補の人数も含めて、教団全体としてそれなりの女性僧侶がいるということだろうと察することができる。開教使の異動と女性開教使の少なさの相関関係については、丁寧な議論と考察が必要である。

⁸ ケネス・タナカ (前掲書, 30-34) にも述べられている。例えばナティアは、アメリカの仏教を3つに分類し、エリート仏教、エスニック仏教、エヴァンゲリカル仏教と名付ける。エリート仏教は禅をその代表としており教育を受けた白人が多く、エスニック仏教はアジア系が中心となっているアメリカの浄土真宗教団を代表とし、エヴァンゲリカル仏教は創価学会を代表的教団として、アフリカ系の人や低所得の人も多く集う仏教であるとしている。本論では言及していないが、ジェンダーやセクシュアリティの人種化 (racialization of gender and sexuality) に関しては、アジア系アメリカ人の宗教研究の中で行われている (Jonathan H. X. Lee, Fumitaka Matsuoka, Edmond Yee, and Ronald Y. Nakasone eds., *Asian American Religious Cultures Volume one and two*. Santa Barbara: ABC CLIO, 2015, 45-47)。

⁹ Michael K. Jerryson ed., *The Oxford Handbook of Contemporary Buddhism*. Oxford: Oxford University Press, 2016.

人種等の違いに基づく差別や偏見はいけないと多くの人が「わかって」いる。しかし、吉村が体験したように、日本の宗教現場でこれまでのステレオタイプな「僧侶」の姿とは異質な僧侶が登場したとき、人々は意識的、無意識的に偏見をもった発言や行動をとってしまうことがあるかもしれない。報告からは、日本にいるがゆえに人種の違いに基づく偏見から出る発言でショックを受けたと紹介された。今後こうした体験をする人が日本の仏教界でも増えてくる可能性がある。グローバル化が進む社会において、日本の仏教も人種やエスニシティ多様性への対応が求められる日もそう遠くはないと考えられる。

4. おわりに-今後に向けて

日本の仏教にはジェンダーの不平等を感じている人がいる。その現場からの声に、まず宗教者、宗教学者、仏教教団、寺院の関係者が耳を傾けることが大切であると思う。川橋は、自らの役割を次のように記す。「筆者（川橋：引用者注）ができることは、（中略）「こだま」となってより多くの女性たちが語れるように場を広げ、問題の共有を訴えていくことであろう。つまり、仏教教団の差別的な事象の部分的当事者として抵抗や告発の声を上げていきながら、その語りを占有せずに課題の共有へとつなげ、他者との連帯を探っていくことではないかと思われる。」¹⁰

今回のワークショップでは、仏教とジェンダーの現状や変化、現場からの声や思いを聞き、問題意識を一定の範囲で共有することができたと考えている。さらにこれまでの日本仏教とジェンダーに関連して BARC が主催となって行ってきた研究会やワークショップで語られてきた内容も含め、日本仏教とジェンダーに関する本を出版する予定である。日本仏教は、国内外の複雑な環境の中で、ジェンダーや人種等の課題にも対応していくことが求められる。仏教に関わる人、僧侶、研究者、仏教徒には、不平等や差別や偏見などを体験して悩み苦悩している人の声を聞き、その人の体験や現状に想像力をもって一人一人が対応していくことが求められるであろうし、またそうできるのではないかと考えている。

¹⁰ 川橋範子、前掲書、67。川橋は、「こだま」とは香川洋人の紹介した言葉で、「語り手の声そのものではなく、原初の発話への反響として生じたもの」としている。